絵本のなかで、主人公のマックス少年の心の中の暗闇（＝情念）を描くのに成功している。「暗闇」とか「情念」というと、いささか大げさだろうか？　だがあのかいじゅうたちの姿はマックスの心のなかに渦巻くものを、センダックが見事に造形したものだ。かいじゅうたちが親しみやすいところを持ちながら、しかし子どもがおびえるほど恐ろしいことを思うと、やはりこの言葉がふさわしいと思う。

この絵本以前の絵本では、子どもは「良い（＝汚れのない）存在」として描かれるのがふつうだった。もちろん主人公は悪いことをしたり、怒ったり、嫉妬したりするだろう。だがそれはその子のごく表面的な一部分であって、その奥では「良い存在」として捉えられてきた。それがハッピーエンドを宿命づけられた児童文学のあり方だったし、まして絵本は対象とする年齢が低い（と思われてきた）のだから、この傾向はいっそう顕著になる。だがセンダックは、マックスを通じて、子どもの心にも暗闇があり、それを描写することが可能であることを教えてくれた。

**反逆児マックス**

マックスは中扉で初めて登場するが、最初からオオカミの着ぐるみを着ている。この着ぐるみについて、絵本のなかで語られることはないのだが、着ぐるみのおかげでマックスは太くて黒い尻尾を持つことになった。尻尾はマックスの獣性の象徴であり、つまりマックスのなかに自分でコントロール不能の（オオカミのようにワイルドな）ものがあることを、まことに端的に絵で見せてくれる結果となった。さらにこれは着ぐるみなので、脱ぐことができる。脱げば人間に戻れるはず、と読者は自分で気づかないうちに期待を持つ。なんとも秀逸な方法だと思う。

最初の見開きで、マックスは本を踏み台にし、クギを壁に打ちつけている。問題は二つめの見開きなのだが、ここでマックスはフォークを手に犬を追いかけて、階段から飛びおりる。『おかあさんのたんじょうび』[注3]でも『大森林の少年』[注4]でも、主人公を紹介する最初の見開きに階段が描かれており、それが〝成長の階段〟を思わせることは既に説明した。この絵本では階段から飛びおりるという方法で、〝成長の階段〟を逆に使って、マックスの反抗的な気分を伝えている。マックスは自分でもわからない理由で、破壊的で暴力的なことをしないではいられないのだ。その結果、母親に叱られて部屋に閉じこめられてしまう。『おかあさんの〜』でも『大森林〜』でも、母親は味方だったが、マックスは反逆児であり、反抗の矛先は母親に向かっている。この点が、前の二冊とは大きく異なっている。

**森から海へ**

森はどうかと言えば、マックスが閉じこめられた部屋で目をつぶると「にょきり　にょきりと　きが　はえだして」、部屋が森へと変化する。前二作のように少年が森へ行くの